

いのちにぎわう
宝ヶ池公園を
未来へ

2015 TAKARAGAIKE
SYMPOSIUM

主催：京都市、京都府立大学森林科学科、京都学園大学バイオ環境学部
(公財)国立京都国際会館、(公財)京都市都市緑化協会
協力：京都宝の森をつくる会、(一社)日本生態学会・生態系管理専門委員会

広々とした池と多彩な森が広がる宝が池公園

水面をおよぐ水鳥、森にすむ小鳥や虫、カエル…

その豊かな森が今、**大ピンチ！** ナラ枯れや増えすぎたシカの影響で、森は荒れ、咲き誇るツツジの姿も失われつつあります。

この状況を受けて、京都市は「宝が池公園新景観創造事業」として、サクラを中心にモミジやツツジ等を活かした景観づくりを皆さまと共におこなっていきたいと考えています。

京都議定書が採択されたこの地を、地球環境保全の聖地にふさわしい「人にも生きものにも心地よい、美しい森」として守り育てていくため、私たちができるることを一緒に考えましょう！

進行スケジュール

13:00	開会あいさつ 木下 博夫（国立京都国際会館 館長） 主旨説明 森本幸裕（京都学園大学バイオ環境デザイン学科 教授 / 京都市都市緑化協会理事長）	
13:10	第1部「森と人との関わり」について 講演：『自然との共生観の中で生まれた日本の文化』	
13:55	第2部「今」を知る 『宝が池の森の昔と今の様子 ～多様性あふれる森を未来へ～』	
15:05	第3部「未来」を語り合う 『楽しい森ってどんな森？ ～みんなで育む宝が池公園の森～』	
16:20	全体まとめ 田中和博（京都府立大学 生命環境科学研究科 教授） 閉会あいさつ 門川大作（京都市長）	

第1部「森と人との関わり」について

講演

『自然との共生観の中で 生まれた日本の文化』

●上村淳之（うえむら・あつし）

文化功労者、日本画家、京都市立芸術大学名誉教授、京都市学校歴史博物館館長、公益財団法人松伯美術館館長

京都に生まれる。祖母は上村松園、父は上村松箇。花鳥画の第一人者でありながら、本物の自然を求めて南山城村の里山再生に取り組んでいる。1995年、日本芸術院賞受賞。2013年、文化功労者受賞。京都市立芸術大学名誉教授。京都市立学校歴史博物館館長。NPO法人花鳥の郷をつくる会理事長。

第2部「今」を知る

「宝が池の森の昔と今の様子～多様性あふれる森を未来へ～」

公園開設から50年。宝が池の森が今、激変しています。

人の営みとツツジの関係、シカによる影響、ナラ枯れの後の森、京都市の『新景観創造事業』などの話題を交えながら、伝えるべき宝が池の森の魅力、森を守るために必要なことを整理します。

コーディネーター

森は生きものです。絶えず変化していきます。

森は、皆さんのが想像しているよりも速いスピードで変化をしていきます。

植生遷移に従って、その土地の風土に適した森へと変わっていくのが理想ですが、その変化の仕方は、諸条件によって様々であり、場合によっては、特定の植物だけが寡占するなど、不健全な悪循環に陥ってしまうことがあります。

今、宝が池の森がそういうりつつあります。森林の管理不足に加えて、マツ枯れ、ナラ枯れ、シカの食害などの影響により、宝が池の森が衰退し、森林景観も荒廃しつつあります。抜本的な対策を早期に実施することが必要です。



■田中 和博

京都府立大学
(生命環境科学研究科)教授

兵庫県生まれの愛知県育ち。
地理情報システム(GIS)
を利用した総合的な地域森林
計画について研究。著書に『古
都の森を守り活かす』(共著、
京都大学学術出版会)、『森林
計画学入門』(森林計画学会
出版局)など。

パネリスト

新しい景観づくりに込めたメッセージとは？

京都議定書誕生の地である国立京都国際会館を含めた宝が池公園周辺は地球環境保全の聖地です。この地をサクラやツツジの景観で世界各国から訪れる人々をおもてなしできればと思います。圧倒的な景観と我々の森を再生する営みとを繋ぎ合わせることで京都が地球環境を率先して守っていくというメッセージを発信し、人々を突き動かすことができないかと考えました。森再生の設計図とロードマップを作成するとともに、市民、公園管理者、研究者、企業の方々等様々な立場の人がこの活動に集えるような協議会(仮称)「宝ヶ池みどりのプラットホーム」を創設することも検討します。



■大西 功

京都市建設局

みどり政策推進室長

滋賀県出身。市役所入庁後は
一貫して道路行政に携わる。
公園緑地関係は2012年度
に初めて担当部長として京都
水族館の開業及び緑化推進に
携わる。1992年「地球環
境の保全と市民生活」と題す
るシンポジウムを主催。

パネリスト

宝が池がこうなったのは、自然の変化のせい？ 絶対に違います

今の宝が池はかつての姿ではありません。50年前に宝が池の森は管理消失による藪化の危機にさらされました。次にマツ枯れがやってきました。マツ枯れは侵略種による植生破壊で少し異なった側面を持っていますが、続いて起きたナラ枯れとシカ食害の問題は防ぐことができた問題です。我々の生活の変化が里山の無視を導いた結果、コナラの大木が枯れるナラ枯れと自分たちのテリトリーになったと勘違いしたシカなどの野生動物の進出が宝が池を席巻しています。私たちが宝が池の森を、自分たちに山の幸をもたらしてくれるすばらしい環境として見直すことで、今の変な宝が池の姿はもとに戻るはずです。



■柴田 昌三

京都大学大学院地球環境学堂
／農学研究科、両任教授。
京都大学農学博士。

専門は里山資源管理学、景観
生態学、造園学、緑化工学。
国際景観生態工学連合副会
長、日本緑化工学会会長、
日本造園学会常務理事等を務
める。

著書に「竹のある庭」(創森社)、
「ネコとタケ」(岩波書店)等。

コーディネーター&パネリスト紹介

パネリスト

増えて分布を拡大するシカ 新たな関係を築けなければ森林は衰退する

シカは明治から昭和50年頃にかけて個体数が著しく減少し、ほとんど見られなくなるほどでした。その後、狩猟の変化もあって増加はじめ、個体数を増やすだけでなく分布域も拡大しています。京都府下でも同様で、宝ヶ池でも2000年代になってから入ってきたようです。シカは草や木の葉を食べるだけでなく、低木の幹や枝を折り、大きな木の皮を剥いで枯らしてしまいます。放っておけば密度が高まり、低い場所にある植物の多くが失われるだけでなく、その植物を必要とする他の生物までいなくなります。シカとの新しいつきあいを考え、実行してゆかなければ、豊かな森は失われるでしょう。



■高柳 敦
京都大学
(農学研究科) 講師

神奈川県出身。専門は野生動物保全学。1980年代から、大型野生動物による被害問題と保護管理のあり方について研究をしている。京都府、滋賀県、福井県、兵庫県にて保護管理検討委員。食害防除ボランティア「かもしかの会関西」代表。

パネリスト

宝ヶ池の森の今、森が抱える問題は？

宝ヶ池の森は都市部にある貴重かつ親しみやすい森林です。子供たちも多くの訪れます。ですが、ナラ枯れによる低質林や外来種の拡大、シカの食害による森の更新阻害は、皆さんが慣れ親しんでいる森の姿を大きく変えようとしています。多くの生物が見られる豊かな森を未来の世代につなぐため、どこにどのような森を残し、再生させていくのが良いのでしょうか？

今私たちにできることと一緒に考え、一緒に行動できる仕組みを、このシンポジウムを機に具体的に作れたらと思っています。皆様からのご意見やご要望を是非お聞かせ下さい。



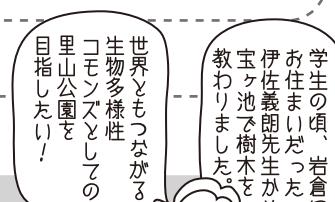
■長島 啓子
京都府立大学
(生命環境科学研究科) 助教

神奈川県出身。森林生態・景観生態学の知見を応用した持続的な森林管理に関する研究に取り組む。地理情報システム(GIS)・衛星画像を駆使するとともに、現地調査による現場の状況把握を重要視。研究のキーワード：森林計画、植生回復、森林再生、生物多様性。

パネリスト

宝ヶ池を彩る野生ツツジ ～里山生物多様性とその恵みの継承へ

桜、つつじは京都盆地の春を彩ってきた里山の花。中でも野生ツツジ類は「躑躅(つつじ)咲く」(西行法師)小倉山や、「紅萌ゆる岡の花」と唄われた吉田山、鞍馬の火祭に使われる松明などで分かるように、最も身近な植物といえるかも。宝ヶ池は里山利用という攪乱がチャートという硬い岩石地で行われて痩せ山になっていますが、履歴と微妙な環境条件の違いで、野生ツツジ類のみならず、多様な里山植生を楽しむことができました。しかし今、森林飽和とシカ食害でたいへんな状況。ヤマザクラ、ミヤコツツジ、カラコギカエデは多様な里山植生を多様な立地条件と共に継承するときの指標となるかも。



■森本 幸裕
京都学園大学教授
京都大学名誉教授
(公財)京都市都市緑化協会理事長
京都大学農学博士

1948年生。京都造形芸大、大阪府大大学院、京大大学院教授を歴任。日本景観生態学会等で会長を歴任。中央環境審議会、京都市美観風致審議会等で委員を務める。

第3部 「未来」を語り合う

「楽しい森ってどんな森？～みんなで育む宝が池公園の森～」

暮らしの中で森を使ってきた地域の人、公園の森で活動するメンバー、研究者等とともに、宝が池で育んでいきたい森の姿や、森とのかかわり方、協働の森づくりについて語り合います。

コーディネーター

宝ヶ池で紡ぐ人と里山の新しい物語

自然の豊かさを皆が感じられ活用していくよう里山を守り、そして、地域の里山利用の歴史・文化を伝えていきたいとの、熱く強い想いを持つプレイヤークスタッフ。その想いと、研究者、市民の想いが共振・共鳴し、広がり続けている人のネットワーク。ここで創出されている信頼関係、ビジョンこそが、この地の里山の新しい姿を導く原動力になる。そう感じながら、昨年の秋、自然再生講習会を実施した。「未来を語り合う」このシンポジウム、もっとたくさんの人たちの想いを共鳴させ、もっと大きな環としていくこと、そして、「人と里山の新しい物語」を世界に発信していくための礎とすることが目標。



■鎌田 磨人

一般社団法人日本生態学会・生態系管理専門委員会 委員長
徳島大学(ソシオテクノサイエンス研究部) 教授

専門は景観生態学、生態系管理工学。広島大学で日本と韓国の里山マツ林の比較研究を行い、学術博士。徳島県立博物館での植物担当学芸員を経て大学に。NPOや市民団体ネットワークの代表も務めている。

登壇者

里山・里地は地域ネットワークの原点。 豊かなみどりを活かした地域づくりを

子どもの頃、宝が池の山で栗の実やカブトムシ、ゲンジを採って遊び回っていました。また伐採したアカマツを荷車に積みキツネ坂をゴロゴロと運ぶのを手伝いました。祖母は松茸をたくさん持ち帰ってきたものです。しかし人が山に入らなくなり、山の生態系は大きく変化しています。エコ学区の取り組みや総合学習を通じ、子どもたちは地域の歴史や産物を調べ、里山作業も体験。新たな発見に目を輝かせています。自然の中で人間も含め生き物は繋がりあっている、しかし人の行動でそのバランスが崩れているのでは？山を守るために何ができるか？などを自ら考える姿は頼もしい限り。情報や人の交流の場としての里地・里山の役割も再認識しながら、地域コミュニティの活性化や安心して暮らせる街づくりと連動させていきたいと考えています。



■岩崎 猛彦

松ヶ崎自治連合会 会長
松ヶ崎小学校学校運営協議会
理事長
公益財団法人松ヶ崎立正会
常務理事

昭和17年生。先祖代々、松ヶ崎に居住。松ヶ崎地域の伝統文化を伝えると共に、松ヶ崎小学校をコミュニティスクールとした地域連携に取り組み、地域発展のために活動している。

登壇者

宝が池の景観は世界に誇るべき貴重なもの

比叡山を背景にした宝が池一帯の景観は、国際会議の議事進行が難局に直面している時、人の心を和み落ち着かせると言われています。このように、会議の意思決定は会議場内だけで決まるものではありません。「京都議定書」の採択は、まさに、この宝が池一帯の風情が大いに関係したのではないかでしょうか。京都市民の森である「宝が池公園」と国際会議が開催される「国立京都国際会館」、隣接しながら互いに景観に配慮していかなければなりません。我々も、国際会館と宝が池公園一帯の景観との調和を維持するとともに、未来に向かって「宝物」である宝が池の自然を育んでいきたいと思っています。



■上田 雄二

(公財) 国立京都国際会館
施設部 部長

大津市出身。国立京都国際会館の施設管理を担当。庭園管理の経験から、自然のテンポに合わせた環境整備を継続することの重要性を経験。

コーディネーター&登壇者紹介

登壇者

私たちの先祖がいかに自然を理解していたか

古来より日本人は自然に宿る神々を感じ、自然への畏敬の念を持ち続けてきました。今もその精神は生活の中に生き続けています。自然を利用する知恵が途絶えることのない営みを創造し、人と森が共生する文化を育み、伝統として受け継いできました。人と森の共生。それは私たちが先祖から受け継いだ文化であり伝統です。そのことに理解を深め、次代に受け継ぐことが現代を生きる私たちの務めではないでしょうか。私たちの活動のフィールドは里山です。生活圏の中にあった里山が生活圏から除外され、里山本来の機能を果たせずにいました。里山の機能を取り戻すことで共生を。まず理解することが重要と考えます。



■奥井 寛之
明徳小学校学校運営協議会
理事長

平成23年わきの山里山再生プロジェクトを立ち上げ活動中。昭和43年枚方市生まれ。左京区岩倉在住10年目。明徳小放課後まなび教室実行委員長・元PTA会長、岩倉明徳学区自治連合会庶務など。

人と森の共生は
伝統と文化を
伝承すること
です。

登壇者

大切なのは「楽しむ」こと。 私たちが目指す「里山アウトドア」

これまでの宝が池シンポジウムで、宝が池の森の現状に危機感を持ったメンバーが集まり、昨年、「京都宝の森をつくる会」は発足しました。大切にしているのは、何よりも自分たちが楽しむ事。フィールドワークや調査、管理作業を通して森を知り、かつての暮らしにかけない、森での営みを体験しながら、とにかく森で遊び、楽しむ。それが私たちの目指す「里山アウトドア」です。たとえば、森林整備で出たナラ枯れ材を、本格的な炭焼き窯で炭にし、フィールドワークの後に、仲間たちでその炭を使ってシカ肉を焼いて食べる。そんな楽しい活動をしています。皆さんも、ぜひ一緒に楽しみましょう。



■高谷 淳
京都宝の森をつくる会 代表
OZI(オジ) 庭園工房 代表

同志社大学経済学部卒 京都造形芸術大学ランドスケープデザインコース卒。京都生まれ、京都育ち。幼少のころは子どもの楽園で遊び、学生時代は宝が池をランニング。現在は宝が池近隣の小学校でラグビーのコーチをつとめ、宝が池には馴染みが深い。

活動
募集中
いっしょに
楽しみま
いっしょに
活動メンバ
募集中です。

登壇者

宝が池は人と生きものが共に躍動する里山公園！

森を探検し、川であそび、生き物に出会い、山の恵みで草木染・・・。それを楽しみに子どももおとなもやってくる場所が‘宝が池プレイパーク’。そこにはどの世代も繋がることができるプレイパークコミュニティが育っています。自然そして人から思いっきり刺激を受けながら文化や技を身につけ、自然に生かされていることを実感する場所です。ドキドキワクワク感は自らの世界を広げる機動力。チャレンジを重ねて得た経験知は生きる力となります。それを支える大切な里山環境が、自由に入ることができほどに劣化した今、お父さんたちが森の手入れを手伝い始めています。森のことは専門家の先生もバックアップ。豊かな人のつながりで豊かな森を取り戻していきましょう。



■野田 奏栄
(公財) 京都市都市緑化協会
環境学習・子どもの楽園プレイパーク担当
(公社) 大阪自然環境保全協会・理事

大阪府出身。住宅設計、都市および緑地計画コンサルタント勤務を経て、フリーで活動。里山や川をフィールドに、自然環境に基づく地域らしさを再構築することをテーマに取り組みを続けている。

仕事場ではナマイズ
家ではネコに
癒されてます

